

## 枝垂桜と和歌の公園

森記念財団研究員  
脇本敬治

大都会には緑が少ないと思われがちだが、実際のところ東京には多くの様々な公園や緑地がある。北風が寒い冬の間は公園に行くことはおっくうに感じるが、3月の半ばを過ぎ、春らしい陽気の日が続くと、桜の開花が気になり、桜の名所がクローズアップされ、公園に行ってみようと思う人が多くなる。

東京では先日3月23日に桜の開花宣言があった。全国の人気のお花見スポットをランキングしたウォーカープラスによると、3月27日現在で1位目黒川、2位六義園<sup>りくぎえん</sup>、3位上野恩賜公園、4位墨田公園、5位六本木ヒルズ 毛利庭園・六本木さくら坂が挙げられていた。目黒川は近年川沿いの桜が見事なことで注目を集めているが、それ以外は全て東京の公園となっている。

上野公園は江戸初期の寛永寺建立の頃、墨田公園は将軍吉宗が桜を植えたことまで遡る、長い花見の歴史を持っている。六本木ヒルズは最近の開発だが、緑を積極的に取り込み新たに桜並木も整備されライトアップも行われている。公園の中で最上位となった六義園は見事な枝垂桜があり、ソメイヨシノに先駆けて満開になることや夜間のライトアップのお蔭で、会社帰りに立ち寄ることができるのが人気を呼んでいると思われる。昨年、一昨年と六義園のライトアップに出かけたが、年ごとに人気が高まっているようだ。今回は桜の人気で注目を集めている六義園を取り上げてみたい。

六義園の枝垂桜は、高さがおよそ15m、幅は20mにもなる立派なもので、開花すると大きな樹の全身が薄桃色の花でおおわれる。ソメイヨシノと異なり優雅に大きく広がる枝ぶりの形の良さは、



品格を感じさせ、華やかな色合いとあいまって、見事な芸術作品と言ってもよい。夜になると、桜の花は暗闇の中に浮かび上がり、その姿は息をのむほど美しいものとなる。刻々と空の色が変わる日没の頃から、カメラを手にした人が桜の周りに一段と多くなる(写真1)。もし桜の時期を逃したとしても、六義園は十二

写真1.ライトアップされた枝垂桜。多くの人たちが写真を撮っている。

(掲載写真はすべて六義園)

分に魅力的なので、お勧めできる公園だ。六義園は将軍綱吉の時代(1702年)に幕府の要職を務めた柳沢吉保が、自らつくりあげた庭園である。吉保は政治家でありながら、和歌に造詣が深い文化人だった。六義園の名は紀貫之が『古今和歌集』の序文に書いた和歌の六つの分類に由来し、吉保は「六義園」(むくさのその)と呼んでいた(注)。六義園は万葉集をはじめ和歌に歌われた数々の名所旧跡、歌枕を取り込んで作られている、いわば和歌のテーマパークともいえる非常に珍しい庭園だ。

六義園の基本的な構造は多くの江戸時代の大名庭園と同じく中央部に池を配し、その周りを周遊できるものとなっているが、庭園の重要な素材となる言葉の多くを和歌山県の和歌の浦周辺から取ってきている。和歌の浦は万葉集に歌われてより、多くの和歌が歌われ、また和歌の神様、玉津島神社が鎮座するいわば歌の聖地とされる風光明媚な土地である。

吉保は和歌に読まれた言葉を選び、新しく作った庭に合わせ六義園八十八境<sup>きやう</sup>を定め石柱を作った(写真2)。その中には尋芳径(はなとうこみち)、心泉(こころのいづみ)、玉藻磯(たまものいそ)といった美しい言葉が選ばれている。

こうした庭園の技法は、「見立て」という日本文化を象徴するものである。イタリアやフランスの庭園ではそっくりそのままの造形で再現されるモチーフが、日本では風景の一部、築山、庭石、橋、樹木などの特徴を捉えて隠喩的に表現される。例えば、池の一角を出汐湊(でしおのみなど)、中の島の築山を妹背山(いもせやま)と名付けることにより、和歌の浦の海岸に見立てていることが分かる(写真3.4)。また、和歌に読まれた内容のみならず、文楽、歌舞伎の名作「妹背山女庭訓<sup>いもせやまおんなていきん</sup>」までが思い起こされ、目に見える風景の奥行きが深くなる。六義園八十八境の言葉を媒介にして、目の景色が時空を超え人々の心や吉保の意図にまで繋がるのである。日本の伝統的な庭園では必ずと言ってよいほど見立てが取り入れられているが、さりげなくなされることが多い。六義園のように一貫したテーマで徹底されたものは他にないのではないか。和歌山出身者や和歌の浦に行ったことがある人が訪れれば、なお一層感慨深いものになるだろう(写真5.6)。

柳沢吉保は完成した六義園を狩野派の絵師に描かせ、霊元上皇に献上したところ、上皇自らが、六義園の景色の中から十二境と八景を選び、公家たちに和歌を詠ませ、それを吉保に下賜された(1706年)。霊元上皇は和歌と書道に非常に優れていたこともあり、六義園の名声は広く知られることになった。六義園は明治に入り三菱財閥を創業した岩崎弥太郎に購入され、昭和13年(1938)に東京市に寄贈された。関東大震災、東京大空襲の被害をほとんど受けることなく、昭和28年(1953)には国の特別名勝に指定された。春先と秋のライトアップの景色も見事だが、昼間に石柱や案内図を読みながらゆったりと散策するのも趣がある。江戸時代の文化人と連想ゲームを楽しむつもりで出かけてみてはいかがだろうか。

(注):「そもそも、歌の様六つなり。唐の歌にも、かくぞあるべき」

紀貫之『古今和歌集 仮名序』



写真2.八十八境<sup>きやう</sup>の石柱「しるべのおか」。

現在は32か所の石柱が残っている。



写真 3.「出汐湊」(でしおのみなど): 八十八境の一つ。湖畔を、満ち潮を待つ湊に見立てている。月の出とともに満ちる潮を読み込んだ和歌があることから、月を連想させる言葉でもある。



写真 4.松が見事な「妹背山」 万葉集を始め多くの歌に詠まれている歌枕。

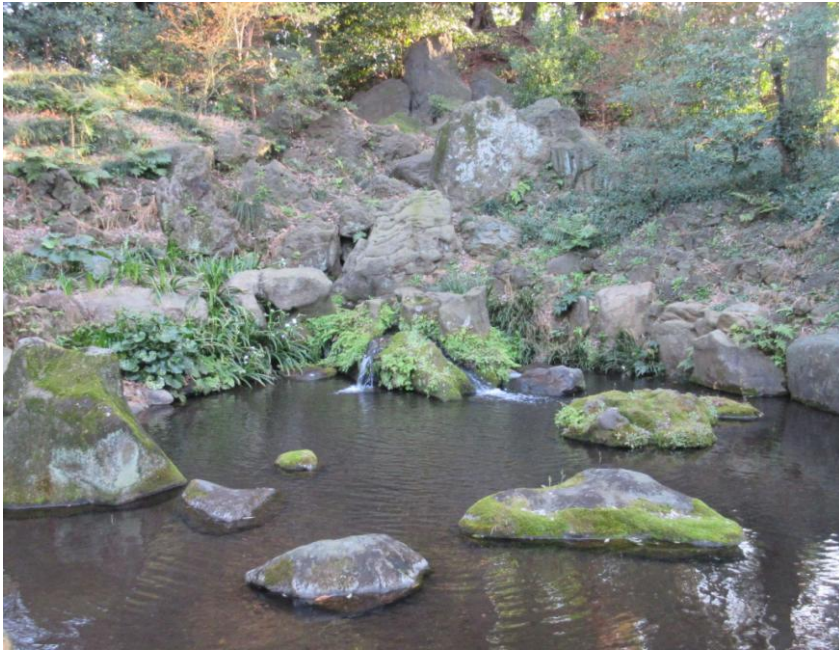


写真 5. 紀ノ川の源流部を見立てた「水分石」(みずわけいし)



写真 6. 条件が良ければ富士山や筑波山を望むことのできる「藤代峠」。歌枕としても有名な和歌山の地名「藤白」からとられている。